

『資本論』 第三部におけるマルクスの困惑と混迷
—生産価格論を中心として—

櫻井 毅

日時：2024 年 12 月 7 日（土）14 時から 18 時

場所：武蔵大学 8 号館 8603 教室

目次

配付資料	i
櫻井毅講演	1
ご挨拶	1
報告	2
はじめに	3
リカードとの出会い	4
リカードの研究を始める	6
リカード全集のこと	7
転形問題との出会い	8
リカードとジェームズ・ミル	11
リカードの困惑	13
生産価格論と転形問題	15
マルクスとエンゲルスの出会い	17
マルクスの経済学研究の形成	18
『国民経済学批判大綱』の効用による需給調節論とカテゴリー批判	19
マルクスの「23冊ノート」	21
『剰余価値学説史』から読む生産価格論の形成	23
『資本論』第三部と「23冊ノート」	24
宇野理論と鈴木原理論	25
マルクスの生産価格論	26
交換価値、使用価値そして価値	27
生産価格は価格形態である	29
生産価格と価値の次元の相違	31
『資本論』とリカード	34
マルクスと経済学原理	37

マルクスの労働価値説	38
価値は生産価格の本質	40
質疑応答	45
転形問題：物量体系と経済原則	45
唯物史観と労働価値説	54
資本家の労働	64
高須賀義博氏と「次元の相違論」	66
謝辞	67
論文 1 『資本論』 第三部におけるマルクスの困惑と混迷	69
論文 2 『資本論』 第三部における生産価格論の混迷について	99

配付資料

1. マルクスの経済学研究の道筋　ブルジョワ経済学のカテゴリー批判（経済学批判体系）から「資本論」体系へ転回
 - ① エンゲルスの問題提起。本質と仮象の顛倒、その逆転による解明。マルクスによるエンゲルスの初期問題意識の継承とその創造的展開。マルクス経済学の発展。
 - ② ヘーゲルのトリアーデの活用（有論、本質論、概念論）——『資本論』第一部第1、2篇、および第3篇以下の第二部と第三部の全体、それぞれ独立の三部分として分割する。
 - ③ 著作名も「経済学批判」から「資本」へ、また内容もイギリス人の古典経済学に似た「経済学原理」の構成を目指す。J. ミル、リカードなどの影響著しいように思う。
2. 転換の契機——「23冊ノート」執筆の過程での生産価格の概念化～第三部9章での明確化
 - ① 価値の生産価格への「転化」の不十分性—マルクス自身の方法の不徹底さ
 - ② マルクスの「価値」規定の曖昧さ—価値と交換価値、あるいは第一部冒頭の価値論における第三部への言及（理論の進展によって再び交換価値に戻るが、ここではその関わりなく価値で考察される、などという）の意味は？
 - ③ 「内的規定」、「内在的本質」とは何か。価値と価格の世界の次元の相異に言及か。
 - ④ マルクスはすでに第一部の価値論で、第三部での価値の交換価値への回帰に言及しながら、何故自らの方法を一貫できずに、価値と生産価格に投下労働量の変化という問題を付け加えてしまったのか。戦前ソ連のローゼンベルグの『資本論注解』においてすら、生産価格が価値の価格形態であることを明記していた。
3. マルクスの労働価値説へのこだわり
 - ① 古典派以来の伝統
 - ② マルクスの「自然法則」（宇野のいわゆる経済原則）の前提になっている唯物史観がその根拠になっているのではないか。宇野『原論』、鈴木『原理論』など、私自身の反省も含めて、すべて共通であったように思う。
 - ③ マルクスが初めて明らかにし、宇野がそれを分かりやすく説明した資本主義的商品経済のもつ特異な客観的性格が、なお主張者自身においてもなお十分に認識され切れていないのではないか。いわゆる「経済原則」なるものについての詳しい再検討が必要であるように思う。

櫻井毅講演

ご挨拶

櫻井 毅

準備にあと 10 分ほどの時間が必要ということですが、みなさんすでにお集まりくださっているのとおりあえず何かお話したいと思います。

今日はわざわざここまで来ていただいて申し訳なかったと思います。

私も何しろ 93 歳を過ぎまして、だいぶ歳取って、頭ももちろんおかしくなっているのですけれど、身体もとにかくもう動かなくなりまして、歩くのもちょっと不自由になって、さっきも女房に送ってきてもらったのです。

そういうわけで十分準備ができなかったので今日の話も十分にはできない、準備したところでたいしたことないと思いますけれども、いろんな点でまだ不十分なんですね。一つは本をだいぶ整理しちゃったものですから、手元に本がない。だから調べようとしても『マルクス・エンゲルス全集』を、ここにはいらっしやらないと思いますけど、若い研究者に全部あげちゃったものですからね。

それでマルクスの手紙やなんかについて主として記憶に頼っているのですが、部分的には他に引用してある文献を使って再引用したりしましたけれども、現物に当たることができていないということがありますし、また、マルクスの主要な文献とエンゲルスの文献の中には『マルクス・エンゲルス全集』にしか載っていないものもあるので、それらも改めて見るということもできなかった。そういう点で引用には非常に不自由しました。図書館で見て調べればできることなのですが、図書館に行くのには交通機関を使ったり、歩いたりしなくてはならないので、図書館も利用できない。

そういう点で非常に不十分で、過去の記憶に頼っている部分もあるし、二次文献に頼っているところもあります。誤りもないとは言えないので、そういう点をご承知の上でお聴きいただきたいと存じます。

今日お話しすることは、マルクスの生産価格論ということなのですが、それについては、最近の2、3年ぐらいの間に、大昔にやったことにまた戻りまして、それをさらに一步進めるというつもりでやってきたのですけれども、昔の今から60年あるいは70年近く昔の修士論文の時から始めた研究なので、それを読み直してみたらもうほとんど8割ぐらいすでに書いてしまっていることが判りました。

その頃は正確に理解できていないことが結構あり、詳しくはまだ書けなかった点も多いんですが、それでも大体の方向は書いているんですね。だから今さら何だろうと思って、自分でも最近読み直して、呆れたのですが、でも決定的なところで欠けている。今日のお話は、その決定的な部分をどこまで埋められるかという問題を、昔の研究をなぞりながら行ったものでもあるのです。

だから、多少前進したところもないことはないですね。そういうわけで、蒸気機関車で引っ張っていたのが電気機関車になって、新幹線とは言わないけど、多少は進みかたが早くなったってところはあるかもしれないけど—まあ大体同じ線路、軌道の幅は多少広がっているかもしれませんが—を走っている、そういう感じがしたにはしたのです。

それで、多少は内容も考え方もちょっと変わってきた点とか、その結果、あるいは良くなってきたのか、あるいは悪くなってきたのか、いずれにしても、変化があった点がありますので、今日はそういうことを全部お話ししておこうと思うのです。

私の考え方は、マルクス経済学から逸脱している、そういうご意見もあるかもしれませんが、逸脱していてもしていなくても、そういうことは私は全然気にしてはいないので、自分の考えた通り進んでいくしかない。ただ、もうこれ以上進めないかもしれませんから、今日せっかく与えられた機会なので、今まで考えてきたことをお話ししたい、そういうように考えております。

報告

司会：小野成志

遅くなりましたが、準備ができましたので始めさせていただきます。

櫻井先生はこれから2時間半喋りたいとおっしゃっています。実際にかかる時間がどうなるかはわかりませんが、先生のお話が終わってから質疑に移りたい